

金石範『火山島』に描かれる金時鐘の済州 4・3 体験¹

岡崎享子(立命館大学)

1. はじめに

在日朝鮮人 1 世の金時鐘 (1929～) は、日本において日本語で文学活動を行う詩人である。彼は植民地朝鮮の釜山で生まれ、幼少期から一九四九年の渡日に至るまで済州島で過ごした。植民地解放後、1948 年 4 月 3 日に済州 4・3 事件 (以下、済州 4・3) が勃発すると²、金時鐘は、南朝鮮労働党 (以下、南労党) の連絡係として活動したことが原因で追われる身となり、1949 年 6 月に日本へ渡った。したがって、渡日の契機となった済州 4・3 は、金時鐘の文学作品の大きな主題の一つである。金時鐘は、2000 年になって初めて公の場で、自身の済州 4・3 の体験を告白した。言い換えると、それまで済州 4・3 の体験を公の場で話すこと、直接的に書くことはできなかった。しかし、2000 年以前にも金時鐘の済州 4・3 体験は間接的、断片的に彼の文学作品の中で描写され、また彼以外の文学者によって描写されてきた。そこで、本発表の大きな目的は、2000 年の体験告白前、金時鐘の体験はどのように記録され、文学作品の中で表現されてきたのかについて明らかにすることである。

金時鐘が 2000 に至るまで、自身の済州 4・3 の体験について公の場で語らない一方で、在日朝鮮人 2 世の作家である金石範 (1925-) ³ は、長編小説『火山島』⁴の中で金時鐘の 4・3 体験を書いていたといえる。金石範『火山島』は 1976 年から 1994 年までに渡り発表された済州 4・3 をテーマとした長編小説である。済州 4・3 が起った当時の済州島と日本の様子について描写されている。その中には、金時鐘の体験を土台にして描かれたと思われる人物と出来事が登場する。なぜなら、2000 年以降の金時鐘の体験の証言と描写が合致するからである。2001 年の金石範と金時鐘の対談録のタイトルでもある『なぜ書きつづけてきたか なぜ沈黙してきたか』⁵からも分かるように、金時鐘が 4・3 の体験やそれ自体について沈黙してきたのとは反対に、金石範は直接体験していない済州 4・3 を描き続けてきた。

そこで本発表では、金時鐘の済州 4・3 の証言と、金石範が『火山島』で書いた金時鐘の体験に該当する内容とを比較し、金時鐘が済州 4・3 の体験について沈黙する一方で、金石範が体験せずに出来事を書くことの意味を考察する。具体的には、まず初めに体験、記憶を書くということの意味を検討し、済州 4・3 体験を書くという行為を出来事とそのトラウマの関係性から読み解く。次に、『火山

¹ 本発表は、JSPS 科研費 (特別研究員奨励費) 20J-13971 の研究成果の一部である。

² 『済州四・三事件真相調査報告書』では、済州 4・3 について「1947 年 3 月 1 日を起点とし、1948 年 4 月 3 日に発生した騒擾事態及び 1954 年 9 月 21 日まで済州島で発生した武力衝突と鎮圧過程において住民が犠牲になった事件」と定義している (済州四・三真相究明及び名誉回復委員会『済州四・三事件真相調査報告書』日本語版、2014 年、584 頁)。

³ 在日朝鮮人二世の作家。1925 年、母が済州島から渡日して 3、4 ヶ月後に大阪・猪飼野 (現生野区) で生まれる。京都大学文学部美術学科卒業。13 歳から歯ブラシ工場、看板店見習い、鐵工所工員、新聞配達などをして独学。14 歳のとき済州島を訪れる。1957 年、『文芸首都』に「看守朴書房」「鴉の死」を発表して以来、済州 4・3 の追求をライフワークにする。その集大成が『火山島』である (国際高麗学会日本支部『在日コリアン辞典』編集委員会編『在日コリアン辞典』明石書店、2012 年、初版第 2 刷発行)。

⁴ 本発表では、金石範『火山島』第Ⅲ巻、文藝春秋、1983 年の第五刷版を底本とする。

5

島』の作品分析を行い、金時鐘の「郵便局事件」の体験証言と金石範『火山島』における描写を比較分析し、出来事の体験者が書いた文学作品と、出来事の体験者から話を聞いて書かれた文学作品の違いについて考察する。

2. 体験を書くということ

トラウマという観点から金時鐘の作品やライフヒストリー考えると、済州4・3は彼にとって人生の転機となる出来事であり、それは現在にもある種の「傷」となって癒えることなく抱き続けている彼の一部であるといえる。特に、金時鐘が目撃した数々の惨たらしい死を目にしたことは、その後の人生を歩む上での「トラウマ」になるに違いない。それらの「トラウマ」がどのようにフラッシュバックされるのか、どのように後の人生で再び記憶が登場するのかを、文学作品から考察することによって、新しい金時鐘文学の読み方が可能となるであろう。

ベッセル・ヴァン・デア・コークは、記憶は語り手によって絶えず変化するということを述べ、それとは対照的に、戦争でトラウマを負った人々の場合には、そのトラウマの記憶の説明は変わることなかったという分析結果を報告している⁶。さらに、子供や友人が事故でけがをするのを見てしまうなど、何か恐ろしいことが起こると、その出来事を強烈な記憶としてかなり正確に覚えているという点も指摘している⁷。これらの分析結果は、金時鐘が済州4・3によって抱えた記憶やトラウマの関係性と重なる箇所があると考えられる。なぜなら、金時鐘の作品には、節々に済州4・3の原体験が土台になっている表現や内容が多く含まれているからである。

特に、1980年5月18日に起こった光州5・18は済州4・3をフラッシュバックさせるものとなりえただろうし（『光州詩片』）、2011年3月11日に起こった東日本大震災もまた、彼の済州4・3を思い起こさせる要因になったに違いない（『背中の地図』）。その他、2000年以降に積極的行われた済州4・3の真相究明、遺骨の発掘、体験者による証言の収集、済州島への訪問、クッを通した両親との対話は、彼を一気に70年前に引き戻すきっかけになったに違いない。今を生きていると同時に過去を生きているという表現、または取り残されている感覚は、金時鐘の作品の中でも多く描かれていることである。つまり、現在進行形で起こっているあることに直面する度に、済州4・3の時代に引き戻され、再体験をしているのである。

3. 金石範『火山島』に描かれる金時鐘の済州4・3体験

金石範『火山島』は、早い段階について済州4・3をテーマに描いた長編小説である。全15章で構成されており、第1〜9章までは、済州4・3が起こる数ヶ月前から済州4・3の武装蜂起が起こった直後までのソウル、日本の状況について主人公の李芳根を中心とした様々な登場人物の視点から描かれている。第10〜12章までは、武装蜂起が起こった直後から、翌月の単独選挙が実施される1948年5月までの済州島の様子が描かれている。

前述したように、『火山島』には、金時鐘の済州4・3体験をもとにして描かれた内容がみとれる。それが、まさに、済州島の観徳亭広場横の中央郵便局で起こった出来事、すなわち金時鐘が言及する

⁶ ベッセル・ヴァン・デア・コーク著、柴田裕之訳『身体はトラウマを記録する：脳・心・体のつながりと回復のための手法』紀伊国屋書店、2016年、289〜290頁。

⁷ 同上書、290頁。

「郵便局事件」である。金時鐘は「郵便局事件」に関わった当事者であり、これが原因で軍警から追われる身となり渡日することになった。ここでは、金時鐘の体験証言と『火山島』の内容を照らし合わせながら、「郵便局事件」について考察する。

まずは、金時鐘による「郵便局事件」に関する証言をみていく。済州 4・3 が勃発した当時、金時鐘は、南労党の連絡係であった。1948 年 5 月に、中央郵便局での連絡役をしていた南労党員 2 名が処刑されることに対する報復として、金時鐘は、もう一人の党員 H が郵便局の郵便物を火炎瓶で爆破する命令を受けたのであった。以下は、金時鐘が「郵便局事件」について述べた箇所である。

私と入れ違いに、火炎瓶を投げつける役目の H 君が切手を買うと言って入ってきます。…中略…彼は火炎瓶の包みを差し上げたまま、訳もわからぬ声で絶叫したものですから、局内にいた警備の警官がカービン銃を構えて駆けよってきました。逃げながら力なく放った火炎瓶はさほどの発火もせず、白い煙と臭いだけが立ちこめました。彼は一番奥のドアを走りながら押し出て、真ん中のドアは体をぶつけて表のドアにとりすがるように、さかんに叩いていました。引かなければ出られないのに、必死に押しているのです。それこそぶし大に見開いたあの真っ白い H の眼が、まざまざと私の脳裡に焼き付きました。追ってきた警官が至近距離からカービン銃を連射し、後頭部をふき飛ばされた H はそのドアにしがみついたまま絶命しました⁸。

このように、「郵便局事件」は、失敗に終わり、金時鐘は追われる身に、もう一人の党員は郵便局からの逃走に失敗し、警察官に撃ち殺された。

次に、『火山島』における郵便局事件の記述をみていく。「郵便局事件」についての叙述は、第 10 章（1983 年『火山島』第Ⅲ巻）に描かれている。『火山島』の主人公である李芳根が、事件が起こる観徳亭の横に位置する郵便局に着いた時に、郵便局の中から逃げようとする少年二人を目撃するところで郵便局事件の描写は始まる。

「あけてくれ！どけろ！」／聞こえはしないが、たしかに若者はそう叫んでいた。／「バカ野郎、そこをどくんだ！早く、戸は外すから押すんだ、どけ、どけ、早くどくんだ！」／ガラスに遮られて互いの声が聞きとれない。外側の若者は扉の真ん中の木枠に体当たりをしながら内側へ押し開こうとするのだが、相手はその反動でいっそう必死になって押し返してくる。内側の若者はもう慌てふためいていて、郵便局の扉が外から内側へ押し開かれるようになっていたのを忘れてしまっているのだ。凄まじい、同時に歯がゆいまでにバカバカしい、そして見ていながらどうともならない、針一本突き刺す瞬間もない一瞬だった。と、そのとき、後ろから走ってきた一人の男の打ち下す棍棒の一撃が若者の頭の上で炸裂するのが、ガラス越しに見えた。若者の悲鳴。二、三度棍棒が撃ち落される。キャーッと叫ぶ女の悲鳴がガラスを貫いて聞こえてきた⁹。

ここで描写されている郵便局から逃げようとする少年二人の行動は、上の金時鐘が証言する「郵便局事件」の内容と重なる。また、郵便局の現場は証言と作品で一致している。さらには、「外側の若者」（郵便局から逃げ切った若者）は、金時鐘であり、「内側の若者」（郵便局から逃げきれなかった若者）

⁸ 金時鐘『朝鮮と日本に生きる』岩波書店、2015 年、225~226 頁。

⁹ 金石範『火山島』第Ⅲ巻、文藝春秋、1983 年、第 5 刷版、1986 年、369~370 頁。

は、金時鐘が証言する少年Hであると推測できる。ここからも分かるように、『火山島』において、「郵便局事件」は、李芳根が事件の現場に偶然に遭遇し、事件の一部である少年たちが逃げるところを目撃したという設定として描かれているのである。李芳根は、少年たちを目撃した後、郵便局に入り、局員から少年二人が逃げる前の経緯について聞き、そこで少年二人が五・一〇単選（単独選挙）決死反対と叫び、ビラの束を真ん中の天井向けてまいたことを知らされる。

金時鐘の体験証言と『火山島』における描写を比較すると、いくつかの相違点が見受けられる（引用文の下線部参照）。まず、金時鐘の証言では、「H」が郵便物に「火炎瓶」を投げたという内容が、『火山島』では、「若者」が「ビラ」をまくという内容に置き換えられたという点である。次に、金時鐘の証言では、「H」が「警備の警官」によって「カービン銃」で銃殺されたという内容が、『火山島』では、「男」によって「若者」が「棍棒」で頭を割られたという内容に変更されたという点である。その他、金時鐘の証言にはなかったことが『火山島』には描かれている。少年事件最中の周囲の様子の詳細な描写、二人の会話や一連の動作、「外側の若者」（金時鐘）が、「内側の若者」（「H」）を助けようとしたという点、そこにいた一人の人物が、「外側の若者」に向かって「逃げろ！」と叫んだ点などである。以上のように、金石範は金時鐘が体験した出来事を少しずつズラしながら、かつ事件当時の緊迫した様子を生々しく体感できるように物語化することを試みたといえる。

4. おわりに

最後に、金時鐘が済州4・3の体験について沈黙する一方で、金石範が体験せずに出来事を書くことの意味を考えてみる。金時鐘は、済州4・3を書いた金石範について、「石範兄は四〇年かけて四・三にこだわって書いてますが、僕は書けなかった。むしろその記憶から離れようとしてきた」¹⁰と言及した。さらに、「思い起こそうとすると固まりのまま、わっと押しあがってくるから、言葉にならない。言葉に関わりながら、言葉にしようがない」¹¹と述べた。一方、金石範は、「私にとっての現実の四・三は、骨をみたことでしかないが、身近に時鐘という「現物」がいるわけだ」¹²と言及し、「私の場合は、現場にいないで帰ってきた。やはり私は見物人、部外者なんだよ」¹³と述べた。このように、金石範は、金時鐘という済州4・3の「現物」を通して、「部外者」の立場を取りながら金時鐘の体験を文学作品として書いたのである。その際、金石範は、李芳根が二人の若者を第三者の立場から目撃する設定を選んだ。その背景には、金石範自身が、金時鐘の体験した「郵便局事件」の目撃者、つまりは済州4・3の目撃者であるということを示そうとした意図を見出すことができるのではないだろうか。

参考文献

金時鐘『朝鮮と日本に生きる』岩波書店、2015年

金石範『火山島』第Ⅲ巻、文藝春秋、1983年、第五刷版、1986年

金石範、金時鐘著、文京洙編『なぜ書きつづけてきたかなぜ沈黙してきたか』平凡社、2015年

¹⁰ 金石範、金時鐘著、文京洙編『なぜ書きつづけてきたかなぜ沈黙してきたか：済州島四・三事件の記憶と文学』平凡社、2015年、166頁。

¹¹ 同上書、167頁。

¹² 同上書、215頁。

¹³ 同上書、同頁。